

きのこ採り今昔

高橋 勝雄

昭和35年頃、日本経済は著しい成長の過程にあった。しかしそれは日本国全体の一部分であり、総べての国民が望む満足には程遠いものであった。昭和28年に生産を始めたテレビを初め、洗濯機、冷蔵庫等は一般庶民に於いては「高嶺の花」に等しいものであった。この時代の自動車の生産に於いては、技術力が乏しく、その数量も限られ、その使用は営業企業向けが大半を占め、個人で所有する者はまれである。故に、一般の人々の移動手段は、鉄道、バス、タクシー等の公共交通機関に頼るのが常であった。

私もこの頃は、登山に明け暮れ、大きなリュック「キスリングザック」を枕とし、夜行列車を利用し目的地に近い駅に明方に着き、一番のバスで登山口に向ったのでした。コースによって違いはありましたが、登山者が多く一般の人は稀で町を離れ、高度のある山村の各停留所からはゲートル（脚絆）地下足袋姿に背負籠を携えた人々が乗込んで来る。皆知り合いの仲間らしく挨拶もそこそこにお国言葉での会話が始まる…。話の内容はどうやら、これから向かう「きのこ」採りの場所の様だ。何々の尾根とか、沢筋の径とか…話は尽きない。山間部に入り目的場所で人々は仲間に手を上げ挨拶をしてバスを降りて行く…。終点に着く迄にはきのこ採りの人々は殆ど下車して登山者のみが重いリュックを背に登山口に向うのであった。

そして何日間かの登山が終り、帰りの始発の空いたバスに揺られると、疲れが一度に来て何時の間にか深い眠りに落ち込んでしま

う。そんな眠りの中で、元気な話し声と笑いが聞える。何時しか目が覚めると、現実の世界が目前にあった。山より下り来た地元の人達の自慢話に花が咲いていた。そして足元の背負籠の中には多種多様の自然からの恵みが美しい色彩を帯びて収まっていた。時折バスが揺れるとフーっときのこの香りが車中を満すのでした。そして各バス停に到着するたびに重い背負籠を手三々五々下車してゆくのは山里の人々でした。私はきのこ云う生物には全く関心が無かったのですが、度々この様な場に出会い、少しは足元の生物に目を向けていきたいと思うようになった？のでした。

今日に於いては車の生産も性能も向上し、その上道路網も整備され、山岳深くの目的地まで容易に行く事も可能となっておりますが、ここに記した時代には、登山、山里の生活等は路線バスが移動の足であったのです。この様な光景は、八ヶ岳（東西）、奥那須、白河、甲子高原等で度々出会い、今では懐かしい思い出の一つとなっております。

